

## 根津美術館蔵「春日宮曼荼羅」について

— 本地仏と真言宗の関わりを中心に —

おかざき ゆき  
岡崎 有紀 (岡山県教育委員会)発表  
要旨16  
時  
25  
分  
—  
17  
時  
5  
分松  
ヶ  
崎  
・  
西  
キ  
ャ  
ン  
パ  
ス  
内  
セ  
ン  
タ  
ー  
ホ  
ール

根津美術館に所蔵される重要文化財「春日宮曼荼羅」は、その古様な形式から平安時代の作例を鎌倉時代に写したものとされてきたが、近年では、平安末制作説も提示されるなど、改めて注目されている。本図は、景観年代の古さや社頭を南から捉える視点、全体の構図などにおいて、他の春日宮曼荼羅とは隔絶する。特に、本社を正面観で捉え、限られた社殿のみを描くことから、周囲の景観を広く捉える他の春日宮曼荼羅に対し、礼拝対象としての性格が強いものとして特別視され、却ってその位置付けが不明確となっている。

そこで本発表では、まず本図の制作時期を再考し、樹木や種子の蓮台の表現などから、鎌倉時代13世紀前半の制作とみなす。その上で根津本の構図が、他の春日宮曼荼羅と明確に区別され得るものではなく、継承されるべき要素を多く有する規範的な作例であったことを示す。たとえば、社殿の左側面を表す描写や水谷社の位置などが法隆寺蔵「春日宮曼荼羅」に継承されている。

また時代が下るにつれ、春日宮曼荼羅の本地仏は、社殿から離れ、山上に描かれるようになるとの指摘があるが、社殿の直上に本地仏を描く本図の検討は春日宮曼荼羅成立を解明する上で重要な意味を持つ。中世の起請文や「融通念仏縁起絵巻」の描写からは神のいる場が重視され、社殿を神とみる意識があったことが推測される。このことから本図の本地仏と社殿とは上下で本地垂迹を表すと指摘できる。同様の構図は狩場明神・丹生明神像を始めとして真言宗系の造形に多くみられ、その起源も醍醐寺の孔雀明王像などに求められる。さらにこれらにおける本地仏の多くが、真言宗系の絵画でよく用いられた種子で表される点も看過できない。

本図の制作された13世紀前半の南都においては、興福寺四恩院の十三重塔建立や春日西塔の再建などが行われた。十三重塔内には春日社の本地仏が安置され、真言僧が務める加持御供を担う拠点でもあった。また西塔は12世紀前半に春日社の神域に建立されたもので、その鎮壇は東寺僧が行い、塔内にも不空羂索観音像を納めるなど、興福寺南円堂と関連付けられていた。さらに毎年の春日西塔唯識会では京都において不空羂索護摩の勤修が真言僧によって行われるなど、真言宗と春日社を結ぶ場所でもあった。このような状況から一宮の本地仏を不空羂索観音で表すことは、南円堂信仰に基づく摂関家の古い本地垂迹説の反映という意味に留まらず、真言僧の関わりを示唆するものとも推察される。

本図の制作者には当時摂関の職を務め、西塔の再建にも携わった九条道家などが想定される。彼の祖父である九条兼実の周囲には御持僧として常に真言宗僧がおり、兼実の寵愛を受けた道家もその環境を踏襲していたものと推測される。

以上の検討により、本図は摂関家が主体でありつつも真言宗の春日社への関わりを背景に制作された絵画だと結論付ける。